

中国山東省泰山調査報告

矢澤知行

1. はじめに

愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会に属する藤田勝久氏と筆者は、2008年12月8日から8日間の日程で、中国山東省に位置する古来の巡礼地・泰山をはじめ、山東省（一部、江蘇省）の各地で寺廟や博物館などの取材を行った。調査の概要は次の通りである。

日程：2008年12月8日（月）～15日（月）

人員：藤田勝久（愛媛大学法文学部教授）、矢澤知行（愛媛大学教育学部准教授）

調査地および訪問先：

- 1日目（12/8） 上海市：復旦大学考古研究所・出土文献与古文字研究中心
- 2日目（12/9） 済南市：山東省博物館・済南市博物館、泰安市：岱廟
- 3日目（12/10） 泰山：玉皇廟など
- 4日目（12/11） 泰山：碧霞祠など
- 5日目（12/12） 曲阜：孔廟・孔林
- 6日目（12/13） 臨沂：臨沂市博物館、連雲港：連雲港市博物館
- 7日目（12/14） 上海市：上海書城・上海古籍書店
- 8日目（12/15） 帰国

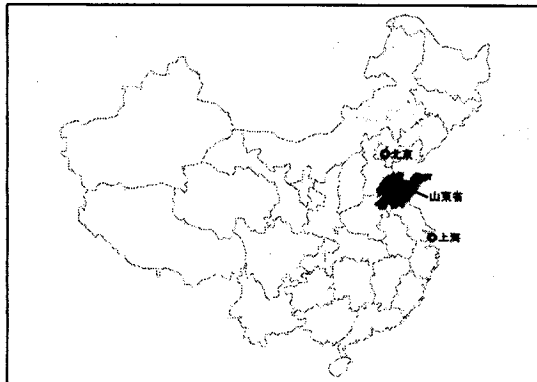


図1 山東省の位置

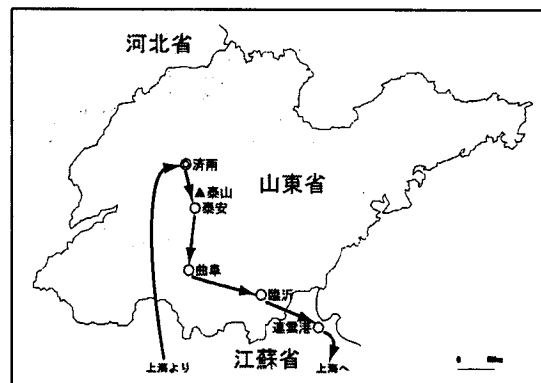


図2 調査旅程概略

2. 行動記録

【1日目（12/8）】

13:05発の中国東方航空MU276便で松山空港を出発、ほぼ定刻通りに上海浦東空港に到着する。空港からリムジンバスに乗り、五角場で下車、そこから徒歩で復旦大学に向かう。考古研究所と出土文献与古文字研究中心（出土文献・古文字研究センター）を訪問、後者に所属の廣瀬薫雄氏と3人でキャンパス近隣のレストランにて夕食。その後、タクシーで上海駅に向かい、22:10上海始発、済南行きの寝台特急（T106次）に乗車する。座席は4人コンパートメントの軟臥（一等寝台）。同室になったのは台湾と上海の2人の男性ビジネスマンだった。しばらく歓談の後、心地よい揺れのなか就寝。

【2日目（12/9）】

列車は定刻通り朝7:00過ぎに済南駅に到着した。天候は上々で、予想していたよりも暖かい。地図などを購入してから、駅前の食堂で簡単に食事を済ませ、旧市街まで徒歩で向かう。済南の街の特色は、いたる

ところに湧く泉と、網の目のように張り巡らされた水路である。これらの泉では、バケツを持った人々が次々と生活用水を汲みにやってくる光景が見られる。

その後、山東省博物館（図3）を参観する。展示は、龍山文化や戦国齊などに関する考古・歴史関係が充実。自然科学分野の展示の中では巨大な恐竜の化石がもっとも目を引いた。つづいて済南市博物館を見学し、長距離バスターミナルに移動して、泰安行きのバスに乗車する。2時間余りで泰安に到着後、宿泊予定のホテル泰山華僑大厦にタクシーで向かう。

荷をほどいてしばし休憩し、16:00ごろから泰山巡礼の起点となる岱廟（図4）を見学する。歴代皇帝の封禅の儀式に関わる史跡が残されており、とても風格がある。翌日向かう予定の泰山を遠望するが、薄く靄がかかっている稜線ははっきりと見えない。夕食（羊のしゃぶしゃぶ）後、ホテルに戻って就寝。

【3日目（12/10）】

いよいよ、今回の海外調査の主眼ともいえる泰山登山である（中国史上における泰山信仰の位置づけについては、藤田氏の論稿を参照）。現在、泰山へのアプローチとして最も一般的な方法は、ふもとの泰安市から中腹の中天門（海拔847m）までバス、そこから南天門（海拔1,420m）までロープウェイで登り、最後は稜線上の緩やかな道を進んで海拔1,545mの泰山山頂に到る、というものである。大半の参拝客はこのルートを用いている。今回は、そうした交通機関に頼らず、古来の巡礼路を辿ることを試みた。すなわち、泰安の岱廟から距離にして約9km、標高差約1,500m、7,000段を超えるといわれる石段を登って登頂し、同じ道を辿って下山することにしたのである。冬季の登山ゆえ、不測の事態に陥ることも考慮したが、幸い好天で積雪もなかったため、当初の計画通り遂行することにした。

起床してホテル隣の食堂で朝食（ワンタン）。近隣の市場でチョコレートやみかんなどの携行食を入手し、余分な荷物はホテルに預けて出発する。前日に参観した岱廟の北に位置する岱宗坊と呼ばれる山門が、泰山登山の起点となる。めざす泰山はほぼ北の方角にある。山の方を見やるが、昨日と同様に薄く雲がかかっている、稜線ははっきりとは見えない。午前10:00ごろ歩行開始（以下、泰山の巡礼路については図5を参照）。関帝廟の脇の一天門から石段の登りが始まる。紅門宮をへて、万仙樓のチケットオフィスで入山券（閑散期料金100元）を購入する。はじめのうちは、碑林を横目に見ながら軽快に登る。斗母宮を過ぎると、チケットのチェックポイントがあったので提示する。廻馬嶺を過ぎるあたりから傾斜が急になってくる。木々の間から中天門を見上げながら確実に高度をかせぎ、12:30ごろ中天門到着。

中天門付近にはバスターミナルとロープウェイ乗場があり、食堂や土産物屋が軒を連ねている。そのうちの一軒に入り昼食（刀削麵、

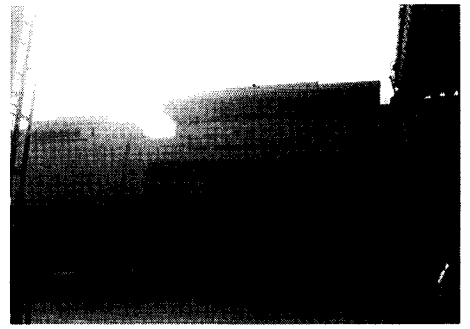


図3 山東省博物館

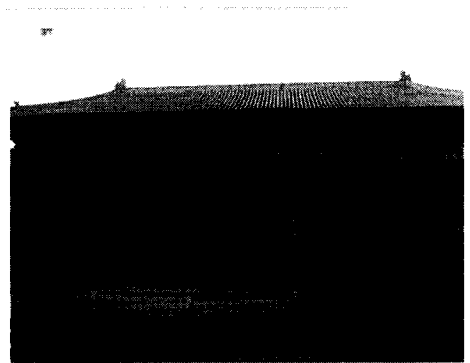


図4 岱廟

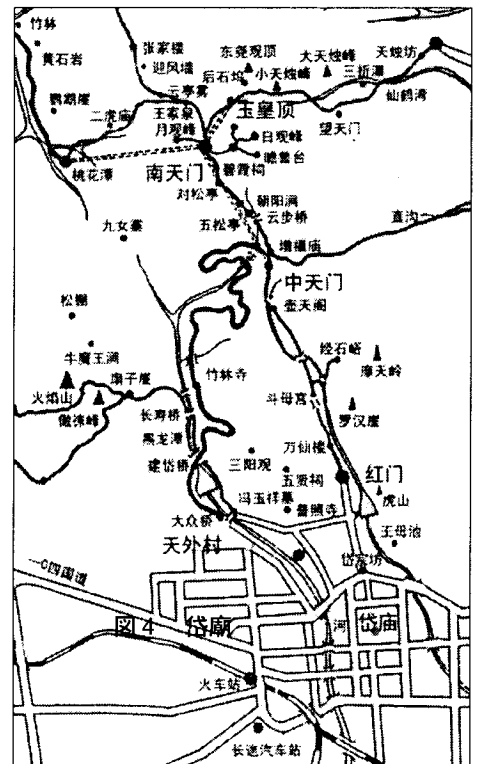


図5 泰山巡礼路概略図

山菜炒め、煎餅^{チエンピン}）をとり、再び登山に取りかかる。次の目標は南天門である。最初は比較的緩やかな登りだ。左手に滝を臨む雲歩橋や、始皇帝が風雨を避けたといわれる五大夫松などの見どころが続くので飽きない。松林が溪谷をはさんで向かい合う対松山などを経て、いよいよ「十八盤」（あるいは「摩天雲梯」）と呼ばれる最も険しい登りにさしかかる（図6）。距離にすれば1kmに満たないが、1,633段、標高差にして400mあまりを一気に登る。石段の一段一段の幅が狭い。時間は十分にあるので、ペースを上げず、着実に登り続けて、15:00ごろ南天門に到着した。



図6 十八盤の石段

南天門からは、稜線沿いに東へと進む。整備された広い遊歩道を歩き、孔子廟を通り抜けて、15:30ごろ、山頂直下の神憩賓館にチェックインする。“山小屋”程度の設備を予想していたが、三ツ星ホテルだけあって、なかなか高級な造りであった。（シャワーの給湯が途中で止まってしまったのはご愛敬。）

日没までまだ間があるので、荷物を置いて、山頂（玉皇頂）、無字碑、“五嶽獨尊”碑、日観峰などを見て回る。夕食を南天門の近くの食堂で済ませ、真っ暗な道をホテルまで戻る。さすがに夜になると冷え込む。風も出てきている。客室に戻って、窓から見た泰安の街の夜景はすばらしかった。おりからの風で、山に掛かっていた霧も飛んだようだ。明朝は御来光を拝む予定なので期待できる。十分に暖房の効いた部屋で就寝。

【4日目（12/11）】

6時半に起床。防寒装備を整えて、ホテルの玄関口に集合。吐く息は白い。すでに薄明るくなりつつある。空に雲は見えない。ホテルのスタッフに案内されて、御来光を拝むのに適したスポットへ向かう。徒歩にして5分程度で、東の空を見渡せる断崖の淵に着いた。そして7時過ぎ、日の出の瞬間は来た。水平線に薄い雲が掛かっていたが、それでも十分に美しく神々しい景色を楽しむことができた（図7）。泰山の山頂から東の方向を見渡すと、さえぎるものは何もない。まるで大海から浮かび上がってくるような御来光である。

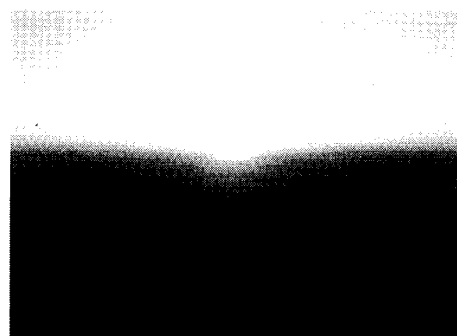


図7 泰山山頂から御来光を拝む

ホテルに戻って朝食後、碧霞祠（図8）を参観する。女性を中心とした熱心な参拝者が次々と訪れ、台に膝をついて、線香の束を捧げ持ち、頭を伏せる儀礼を行っている。



図8 碧霞祠

ところで、碧霞祠をはじめ、泰山各地の寺廟では、南京錠を用いた願掛け（図9）が盛んに行われている。錠の側面に釘などで願掛けの内容や氏名、日付などを記したものが、廟内の至る所につながられているのだ。この願掛けについて碧霞祠の道士に尋ねると、財や福などをこの錠で“繋ぎ止める”意味をもつという。藤田氏が前回（2000年）泰山を訪れたときには、この光景は見られなかったというから、比較的最近始められた習俗と考えられる。



図9 南京錠を用いた願掛け

再びホテルに戻り、下山の準備をして出発する。南天門のロープウェイ駅の上に位置する月観峰でしばし休憩し、泰山の天上界に名残を惜しむ。11:30ごろ南天門から下山に取りかかる。足を踏み外

すと転落する恐れがあるので、慎重に下る。途中、振り返ってみると往路で苦労した「十八盤」の石段の連なりの全容を視界に収めることができた（図10）。

中天門付近で昼食（ラーメン、食後のデザートに焼芋）を取り、さらに下る。石段の道沿いには土産物屋や食堂が点在しており、掌にのる程度の小さな石彫を売る男性や、鳩笛を売る女性がいて、参拝者にしきりに声を掛けてくる。

藤田氏が膝を痛めたため、ゆっくりと下っていると、似たようなペースで寄り添うようにして下る母娘と思しき二人がいた（図11）。娘のほうは二十歳くらいであろうか。二人とも、地方から出てきたように見える。話しかけてみたが、訛りが強く、ほとんど聴き取れなかった。母の方が、娘に腕を貸して、一歩ずつ慎重に石段を下っている様子を見て、初めは娘が膝を痛めているのかと思った。だが、しばらくして藤田氏が気付いた。娘は眼を病んでいたのである。今朝がた参拝した泰山の山頂近くの碧霞祠には授児や治眼などの御利益があるというから、この母娘も、我々と同様に徒歩で山頂まで登り、願掛けをしてきたのだろう。その道中は過酷なものであったにちがいない。観光客の溢れる山上に対して、夕刻の参道はひっそりとしている。その道をしずしずと下る母娘に出会って、二人の幸福を願うとともに、今も泰山に庶民の信仰が息づいていることを実感した。

17:00ごろ一天門まで下り、タクシーで泰安のホテルへ。その夜は、一昨日のレストラン（羊のしゃぶしゃぶ）でふたたび夕食を楽しみ、泰山調査の成功を祝った。

【5日目（12/12）】

朝食（ワンタン、^{ヨウピン}油餅）後、タクシーでバスターミナルへ向かう。曲阜行きのバスをしばらく待って乗車し、10:30ごろ曲阜に到着。まず、孔廟（図12）を参観する。奎文閣と大成門の間に位置する十三碑亭とよばれる碑林が充実しており、「加封孔子制誥碑」

（後述）をはじめとした元代の碑も多数実見することができた。電動輪タクに乗って12:30ごろ孔林に移動、孔子の墓地などを訪れた。静かな林の広がる広大な敷地には、孔子の歴代の子孫たちの墓が点在している。再び輪タクでバスターミナルに向かい、パンなどを買って臨沂行きのバスに乗り込む。予想外に時間がかかり、結局、臨沂市北西郊外の長距離バスターミナルに到着したのは、すっかり日も暮れた17時半くらいだった。タクシーで新聞大酒店に向かい、チェックイン後、ホテル近くの餃子専門店で夕食をとった。

【6日目（12/13）】

風が強く、かなり寒い朝だ。ホテルのレストランで朝食後、荷物を部屋に置いて、市内の見学に出発する。まず、徒歩で銀雀山漢墓竹簡博物館（図13）へ。1972年に発掘された漢代の墳墓の遺構が残っており、そこから出土した竹簡などの資料が数多く展示されて



図10 十八盤の全容



図11 泰山の母娘



図12 孔廟



図13 銀雀山漢墓竹簡博物館

いる。参観後、タクシーで臨沂市博物館（孔子廟に併設）に赴くが、閉館中で参観できず、ホテルに戻ってチェックアウトし、長距離バスターミナルへ。連雲港（新浦）行きのバスに乗ったが、予想外に時間がかかり、到着は15時ごろ。上海行きの飛行機の出発時刻まであまり余裕はなかったが、市域西部の連雲港市博物館に急行して駆け足で参観した。その後、タクシーで空港に向かう。このタクシーの運転手との意思疎通がうまくいかず、少々冷や汗をかいたが、連雲港市西郊の白塔阜鎮にある空港に無事到着した。17:45発の中国東方航空MU5522便で18:35に上海虹橋空港到着。タクシーで宿舍の金門大酒店まで移動し、20:30ごろから雲南路の海鮮レストランで遅めの夕食を取る。

【7日目（12/14）】

上海市内に滞在して、帰国の準備と資料収集（上海書城・上海古籍書店）を行う。復旦大学の廣瀬氏と再会し、最後の夕食（羊肉のしゃぶしゃぶ）を満喫する。

【8日目（12/15）】

早朝にチェックアウトし、地下鉄とリニアモーターカーを乗り継いで浦東空港へ。9:30発の中国東方航空MU275便で12:10に無事に松山に到着した。

3. 補論：元代の泰山・曲阜について

今回の調査で訪れた山東省には、13～14世紀の元朝にゆかりのある旧跡や文物が数多く残されている。山東半島西部の膠萊運河の史跡や、中国でも屈指の名刹として知られ、貴重な元碑が残る靈巖寺などである。今回調査した泰山や曲阜にも元朝に関わる文物は少なくない。本節では、それらについて簡単に紹介しつつ、元代の宗教文化の状況について一瞥しておきたい。

まず、『元史』巻76祭祀志・嶽鎮海瀆によれば、世祖クビライの至元28年（1291）、五嶽の神々の帝号が定められ、東嶽泰山には「天齊大生仁聖帝」の号が贈られたという。歴朝の君主がこのように五嶽に称号を贈るのは、『史記』巻28封禪書に、“天子祭天下名山大川、五嶽視三公、四瀆視諸侯…”と見られるような古来の祭祀の方法に則ったものと考えられる。ところが明の洪武帝は、詔勅を発して歴朝の称号乱発を止めさせ、たんに東嶽泰山とのみ呼ばせようとした（『明史』巻49禮志・嶽鎮海瀆山川）。しかし、その後も泰山の崇拝者や道教の信者らは皇帝の称号に執着し、泰山の神像を皇帝の姿で表す習慣はそのまま残されたといわれる。

チンギス・カン以来のモンゴル政権に由来する元朝は、もともと中国の伝統的な文化を軽視する傾向を持つと考えられがちであった。例えば、いわゆる“漢人・南人”を差別的に扱ったこと、当初科挙を採用しなかったことなどがその理由である。そうした傾向を完全に否定するものではないが、一方で、元朝は、上述のように五嶽を尊重するような中華的伝統重視の姿勢もみせたのである。

元朝の文化政策については森田憲司氏や宮紀子の研究に詳しく、儒教保護政策を大々的に打ち出した事例など、旧来の理解を覆すような史実が近年明らかにされている。元朝によるそうした儒教保護の一大モニュメントともいえるのが、曲阜孔廟の十三碑亭に立つ「加封孔子制誥碑」である（図14）。同碑は、大徳11年（1307）の武宗カイシャンの即位後まもなく発令された詔を巨石に刻んだものである。その内容は、北宋の真宗の代に孔子に贈られた封号「至聖文宣王」に、“大成”の二字を加封して、“大成至聖文宣王”とする、というものである。この碑の特徴は、モンゴル語に倣ってパクバ字で左行から右行に向けて書かれ、各行に小さめの雅文漢文の原文が添えられる形で刻まれている点にある。新たに制定されたモンゴル政権特有のパクバ

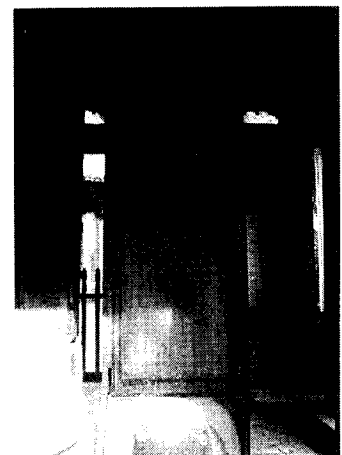


図14 加封孔子制誥碑

文字を用いながらも、孔子を尊重し儒教を保護する内容が語られている点が、本碑の興味深いところである。また、同様の内容を持つ「加封孔子制誥碑」が、上述の詔から至大3年（1310）までの約三年の間に、大カアン（チンギスハーン）の仰せによって中国全土の孔子廟に一斉に立てられた点も注目される。

ところで、中国において、泰山や孔廟などを含め、いわば“官の信仰”から“民の信仰”へと移行したのは、宋代以降だといわれる。さらに明代まで下ると民間の信仰はいっそう充実し、前述の碧霞祠などを含め、多くの巡礼者たちが盛んに泰山などを訪れるようになったといわれる。とすると、宋代と明代の間に位置する元代において、巡礼はどのような様相を呈していたのだろうか。

この点について、まだまとまった考証を示すことができる段階にはないが、さしあたり以下の事例を示しておこう。泰山において、自然石に「石敢当」の文字を書いて護符とする習俗があったことについては、藤田氏の論稿でも触れられているが、元の陶宗儀の『輟耕録』巻17には、「石敢當」について“今人家正門適當巷陌橋道之衝、則立一小石將軍、或植一小石碑鐫其上曰石敢當、以厭禳之。”と記されており、人家の正門が路地や橋などの突き当たりに面していたら、小さな石將軍なるものや、「石敢当」と書いた小さな石碑を立てたりして、悪霊を払いのける風習があったことがわかる。また、五嶽を図形化した五嶽真形図の護符などを含め、これらのお守りが当時の民衆に受け入れられていたことが、元代の文集や地方志などを通じてうかがえる。さらに、元代の雜劇や元曲にも、東嶽泰山を取り上げた例が垣間見られる。つまり、モンゴル系の元朝のもとでも、民衆の信仰の土壌は変わることなく受け継がれていたと考えられるのである。泰山の東嶽大帝・碧霞元君信仰や普陀山の観音信仰を含めた元代における宗教事情と巡礼の諸相については、いずれ稿を改めて論じてみたい。

【主要参考文献】（アルファベット順）

- ・シャヴァンヌ著、菊地章太訳『泰山 中国人の信仰』勉誠出版、2001年。
- ・藤善真澄「日中交流史上の泰山靈巖寺」『関西大学東西学術研究所紀要』37、2004年。
- ・船田善之「蒙文直訳体の展開—「靈巖寺聖旨碑」の事例研究」『内陸アジア史研究』22、2007年。
- ・船田善之「「靈巖寺執照碑」碑陽所刻文書を通してみた元代言書行政の一断面」『アジア・アフリカ言語文化研究』70、2005年。
- ・桂華淳祥「金元代石刻史料集—靈巖寺碑刻」『真宗総合研究所研究紀要』23、2004年。
- ・李徳明主編『五岳之首 泰山』（山東自助遊叢書・泰安巻）山東友誼出版社、2001年。
- ・宮紀子『元代出版文化の研究』名古屋大学出版会、2006年。
- ・宮紀子「大元加封碑—モンゴル王朝と儒教」『月刊しにか』12-3、大修館書店、2001年。
- ・森田憲司『元代知識人と地域社會』汲古書院、2004年。
- ・中村淳「山東靈巖寺大元国師法旨碑」『駒沢史学』64、2005年。